・・1月25日礼拝メッセージ・・　　説教）辻師

「いのちを捨てるために来た」（ヨハネ10章7-18節）

だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです。（10:18）

バーネット作の『消えた王子』は、民衆から希望の星と慕われながら突如いなくなった王子を、やがて帰って来ると500年待ち続けた人たちの物語です。作者は、キリストに希望を置いて待ち続ける者の心を描写するためにこの話を書いたのかもしれません。救い主を待ち続けたイスラエルの民のため、そして全人類のため、2000年前にキリストはこの地に来てくださいました。

1．イエスは門

イエスは10章1-6節で、羊の囲いに門から入る羊飼いと、囲いを乗り越えて侵入する盗人について語りました。もちろん羊飼いはイエスで、神の民はこの羊飼いの声を聞き分け、彼にだけついて行くと言われています。しかしこのたとえがまったく理解されなかったため、今日の箇所を話されました。そこでは新たに、イエスが門であることが明らかにされます（10:9）。囲いの中に入って安全に守られ生きながらえるためには、門を通ることが絶対条件です。人が救われるためには、必ずイエスを通らなければなりません。イエスを通った者は牧草を見つけます。人間の魂と体が満たされるための唯一の道がイエス・キリストです。

2．主のもの

ついで、良い牧者と盗人の対比がさらに掘り下げられます。盗人は私たちから盗み、私たちを殺し、滅ぼしますが、イエスは私たちに命を与えます（10:10）。そのちがいは、両者の考えから来ています。牧者でない者は、ただ雇われているだけ、自分の生活やもうけのために羊を飼っているだけなので、狼が来ると逃げ出します。彼らは雇人であり、羊のことを心にかけていないのです（10:12-13）。（牧師である私は、自分の生活や満足のために働きを行っていないか、いつも問いかけます）羊飼いは、羊を「自分のもの」「私のもの」と考えます（10:12,14）。親や夫や王が「おまえは私のもの」と言ったら、私たちは不快な気になるでしょう。しかしキリストがそう言ってくださるのは、決して所有や支配のためではありません。私たちが命を得、しかも豊かに得るため（10:10）なので、私たちは心から喜んで「私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊」（詩篇100篇3節）と言うことができます。パウロは「生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」（ローマ14:8）と言い、神によって買い取られた私たちは「もはや自分自身のものではありません」（1コリント6:19）と言いました。かつては悪魔と罪の奴隷であった（ヨハネ8:34、ヘブル2:14-15）私たちはいま、神のものとされたのです（ガラテヤ2:20、1ペテロ2:9）。

3．羊が伏す条件

主が「私のもの」と呼んでくださるとき、私たちもダビデと同じように、「主は私の羊飼い」と告白します。そして、主は私たちを「緑の牧場に伏させ」てくださいます（詩篇23:1,2）。『羊飼いが見た詩篇23篇』は、神学的な注解書ではなく、実際に牧羊をしていた著者が自身の経験から書いた本です。羊は4つの条件がそろって初めて横になる（伏す）そうです。

①まったく恐れがない状態である（羊はとても臆病なので）

②群れの中でもストレスがない（仲間との間に摩擦がない）

③はえや寄生虫、害虫にわずらわされない（いらだって落ち着かない）
④食べ物を求める必要がない（いつでも食べるものがあると安心している）
私たちも同様です。恐れ、人間関係の緊張、いらだち、生活の心配があれば、心から安心して眠ることはできません。私たちはまさに、真の羊飼いが必要な者たちなのです。

4．知り、知られる

10 章 14 節と 15 節は、不思議な対比です。「わたしはわたしのものを知っており、わたしのものは、わたしを知っています」とあり、それは「ちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです」というのです。ここでの「知る」は、ただ知識として知っていることを超えています。　バプテスマのヨハネから洗礼を受けたイエスに、天の父から声がありました。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」（マタイ 3:17）。イエスの存在や、人となった謙遜、父の心を行う従順、そのすべてを父は認め、喜んでおられるのです。またイエスも、「子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません」と言い（ヨハネ 5:19）、父の思いのすべてを自分の歩みとしています。ゲッセマネで「わたしの願いではなく、みこころがなりますように」と祈ります（ルカ 22:42）このようなイエスと父の関係は、「わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられる」（ヨハネ 14:10）という言葉に表れています。そして、このようなイエスと父との強い結びつきが、私たちとイエスの結びつきと同じなのだと言われます。私たちはただ神を知っているのではなく、神に信頼し、神の御心を行うことを切に求め、そんな私たちを主は私のものと呼んで喜んでくださるのです。

5．命を捨てる

キリストは私たちのために命を捨ててくださいます。「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」（10:11）　世の人は、キリストが宗教家たちの憤りを買って殺されたと考えます。しかし、キリストは自ら死を選び取りました。使徒信条には「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」とあります。確かに死刑の最終判決を下す権威はローマ総督のものでしたが、だれもイエスから命を奪う権威は持っていません。「わたしには、それを捨てる権威がある」（10:18）と言われたように、イエスご自身が命を捨てる権威を持っていたのです。イエスが命を捨てることは、

①私たちを贖うためでした（私たちの罪を負いきってくださった）
②私たちにはできないことでした（罪ある私たちが死ぬのは当然のことだから）
③自らの主権の行使でした（人から強制された死でなく、自らの力と資格による選択）
④父の御心を願う、神への従順の表れでした（ヘブル 4:15）
⑤復活を信じてのことでした（父はイエスをよみがえらせ＝使徒 2:24、イエスご自身がよみがえる力をお持ちでした＝ヨハネ 2:19）

このようなお方が私たちの羊飼いであることに感謝し、私たちも主への従順をもって歩んでいきましょう。